

# 家族危機とその対応資源の評価方法

渡 辺 顕 一 郎

## はじめに

ソーシャルワーク実践における援助対象として、家族はますます注目されるようになってきている。周知のごとく家族は、人間が生活を営む上での第一次集団である。人は家族に生まれ、家族に育ち、いつかそこからたもとを分かち、今度は自らの手で家族を創り上げていく。ゆえに家族は、人間の生活と決して切り離して考えることのできない必須の営みなのである。

本稿は、危機状況下にある家族に注目する。そして、家族の危機とその対応資源の評価のために、危機理論、家族ストレス理論、家族システム理論等に基づいて、その方法を検討しようとするものである。

## 1. 家族危機の概念

我々人間、そしてその集合体である家族は、絶えず適応を求めて多少なりとも変化を繰り返している。多くの場合、その変化の程度は我々の日常生活を動揺させるほどのものではないが、時には我々のそれまでの生活様式に大きな変革をもたらすような局面を導びくことがある。危機とは、このような決定的、重大な局面であり、いわゆる運命の分かれ目を指す用語である。

これまでおもに個人の危機に注目する従来の危機理論は、このような危機の説明に加えてさらにホメオスタシスの概念をとり入れてきた。個人のホメオスタシスとは、個人が、その内外から生じてくる様々なストレスに対して、自らの平衡状態を保つようにはたらく自己調節機能であり、この

バランスの崩れた状態が危機であると考えられてきたのである。

家族危機の状態も同様に、家族ホメオスタシスの通常レベルのバランスが崩壊した状態であると考えられている (Jackson, 1965; Langsley & Kaplan, 1968; Umana, 1980)。家族は1つのシステムとして、その内外の環境と絶え間ない相互作用を行っており、そこから生じてくる様々なストレスに対して、1つの秩序あるまとまりを維持しようとする。この家族ホメオスタシスのバランスが崩壊し、家族システムの定常性が失なわれているような局面を家族危機というのである。

しかしながら一方、近年家族研究の様々な領域にたずさわる研究者たちによって、家族システムの定常性維持の側面を強調する従来の家族ホメオスタシスの概念のみに基づいて家族をとらえることに異議が唱えられてきている (Speer, 1970; Hill, 1971; Wynne, 1958; Hoffman, 1981)。すでに Maruyama (1963) は、システムのフィードバックについて、逸脱や誤差を発見するとそれを極力少なくし、逸脱に対抗してシステムを保守するような負のフィードバック (形態維持) と、これに対して、逸脱や誤差を発見するとむしろそれを奨励し、逸脱をより増幅させるような正のフィードバック (形態変容) の2つのメカニズムがあることを指摘している。つまり、従来の家族ホメオスタシスの概念は、家族システムの負のフィードバックに象徴される形態維持の側面からのみ家族をとらえようとしており、正のフィードバックに象徴される家族の形態変容の側面を考慮していないという批判がなされてきているのである。<sup>1)</sup> すなわち換言するならば、家族がその形態を維持して安定を保とうとする側面のみでなく、む

1) 家族の形態維持と形態変容の両側面に注目した研究については、本紀要の武田・立木による「家族システム評価のための基礎概念」に詳しい。参照されたい。

しる新たな適応状態に達するためにその形態を変容させる側面にも注目しようとする考え方である。しかしながら家族危機の概念は、このような考え方と相容れないものではない。むしろその逆に、うまく合致するのである。

先にも述べたように、家族危機とは、家族ホメオスタシスの通常レベルのバランスが崩壊しているような状態である。むしろそれは家族システムに正のフィードバックが起る可能性の高い状態であるといえる。言い換えるならば、家族危機とは、家族が均衡のとれた安定状態を一時的に崩壊させてでも、新たな形態変容をとげようとしている転換期であると考えられるのである。

すでに、個人に注目する従来の危機理論においては、危機は、個人または集団にとって決してネガティブな意味をもつものでなく、成長を促進させる可能性を有していると考えられていた。それは古い習慣を動揺して打ち破り、新しい反応を引き起こし、新たな発展を促す大切な要因となりうるからである(山本, 1986)。Golan(1981)は、危機が単に現在直面しているストレスに関係する状況のみでなく、広く人々の生活様式や対人関係に実質的な変化をもたらすと指摘しているが、その変化がより適応的なものであれば、危機によって人間の成長が促進される可能性は高まる。同様に家族危機においても、その形態変容によってもたらされる変化が適応的なものであれば、家族の成長を促進する重要な機会となりうるのである。

しかしながらその一方で、危機への効果的な対処を達成することができなければ、家族は不適応的・破壊的な方向へむかう可能性が高くなる。危機によってもたらされる変化は必ずしも成長促進に結びつくポジティブなものばかりではなく、適応的なものと不適応的なものとの2つの可能性が秘められていることを考慮すべきである。すなわち危機とは、まさにその後の将来を左右するような重大な局面であり、危険と好機とが表裏一体をなし明暗を分かち決定的な岐路なのである(荒川, 1986)。

以上のような点を考慮すれば、ソーシャルワーク実践において家族危機に介入するということは、言い換えるならば家族のその後の将来を左右するような重大な局面に介入することに他ならな

い。援助者は一般に、家族に最も影響を与えやすい立場にあり、またそれでもなくとも危機状況下にある家族は脆弱で、外的刺激に対して敏感に反応しやすくなっている。それゆえに家族危機とその対応資源の評価は、援助者による援助の方向性を決定し、さらにそれによってもたらされる家族の将来を左右するという意味において、重要な技術であることを指摘したい。本稿の意図するところは、この評価方法についての試案を提示することにある。それは、「危機状況下にある家族をどのようにとらえていくのか?」、その方法を少しでも明確にするための試みである。

## 2. 家族危機の評価

それでは一体、家族危機をどのように評価していくのか? その方法として、「家族危機がどのように発生し、またどのように維持されているのか」、そのメカニズムを把握するための試案を提示してみたい。

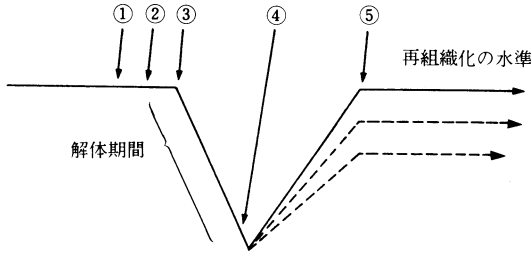
筆者は、家族危機の評価モデルを検討する上で、家族危機の時間的側面と空間的側面の両側面を念頭においた。家族危機の時間的側面は、その時間的経過に基づいた段階的過程に注目し、空間的側面は、家族の内的・外的環境に注目し、それらを構成する様々なシステムの関係性に注目するものである。まずはじめに、これらの2つの側面について触れておきたい。その上で、家族危機の評価モデルを提示することにする。

### (1) 家族危機の時間的側面

Hill (1946) は、家族危機の一連の過程を均衡から不均衡を経て再均衡に至るプロセスととらえて図式化し、また Golan(1979) は、その過程を5つの段階に分けて説明している。この前者の図式に後者の説明を加えて再構成してみるならば、次のようにあらわすことができると思われる(図-1)。

まず最初に、①家族の不均衡状態を誘発するような出来事が発生し(危険な出来事)、②家族がストレスに対して傷つきやすく弱い状態に陥り、その脆弱性が高まる(脆弱状態)。この段階では、まだ家族の機能遂行水準はかろうじて一定のレベル

図-1 家族危機の段階的過程(Hill, Golanに基づく)



①危険な出来事→②脆弱状態→③結実因子→④活動的危機→⑤危機の再統合化

を保っているが、そこへ③家族危機を促進するような決定的事件が発生すると(結実因子)、④家族の均衡状態は崩壊し危機が顕在化する(活動的危機状態)。そして最終的には、⑤何らかの形で家族の対処がなされ再び家族の均衡が取り戻される(危機の再統合化)。

このようにして家族危機の一連の過程を見てみると、それを大きく3つの段階に分けて考えることができよう。ここでは便宜的に、この3つの段階をそれぞれ、家族危機の準備段階、家族危機の対処段階、家族危機の解決段階と呼ぶことにする。

家族危機の準備段階は、先の図の①と②によってあらわされる過程であり、家族に様々なストレスが累積されて、家族が危機に陥りやすい脆弱な状態に追い込まれる段階である。Golan(1979)は、ストレスに直面しながらも何らかの対処を行なって危機が顕在化しなかった場合を潜在的危機と呼んでいるが、家族危機の準備段階は、むしろ危機が潜在的に進行している段階であると考えられることができる。

家族危機の対処段階は、先の図の③と④によってあらわされる過程であり、危機の結実因子となる出来事・変化によって、ついに家族に危機が顕在化し、それへの対処が繰り返し試みられている段階である。

家族危機の解決段階は、先の図の⑤によってあらわされる段階であり、何らかの対処が行なわれて、家族が一応の均衡レベルを回復した状態である。ただし、この危機の解決段階においては、良

好な適応状態に達して再均衡に至る場合もあれば、むしろ不適応的な状態のまま、一応の均衡レベルをかりうじて維持する場合もある。後者の場合、それは家族危機の解決というよりも、むしろ偽似的解決に過ぎないといってもよいだろう。

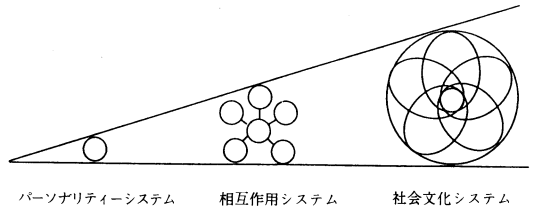
このように、家族危機には一連の段階的過程がある。それは時間的経過に従って家族危機が潜行し、顕在化し、終息するまでの一連のプロセスである。

(2) 家族危機の空間的側面

家族は、それを構成するメンバー間の関係性の上になり立っている。また同時に家族は、それをとりまく外的環境との関係性のなかに存在する。

De Hoyos (1989) は、ソーシャルワークにおいて伝統的に重視されてきた「環境の中の個人」という枠組を、パーソナリティシステム、相互作用システム、社会文化システムの3つのレベルに分けて説明している(図-2)。

図-2 「環境の中の個人」3つのレベル



パーソナリティシステム 相互作用システム 社会文化システム

De Hoyos(1989)による。

テムは、相互作用システムのレベルに位置しており、それは、パーソナリティシステムとしての家族員個人を下位システムにもち、また社会文化システムとしての家族の様々な社会関係を上位システムにもつ。それゆえに、家族危機を評価するにあたっては、家族システムを中心として、その上位・下位レベルのシステムとの関係性を無視することはできない。

まず第一に、家族危機を誘発するようなストレスには、家族システムを構成する下位システムとしてのメンバー個人の変化に起因するストレスとむしろ家族をとりまく上位システムとしての環境

2) 家族ライフサイクルの各段階とその発達課題については、Rhodes (1977) やCarter & McGoldrick (1980) らの研究に詳しい。わが国においては、望月高や岡堂哲雄、小此木啓吾らがこのテーマをとりあげた論文・著書を発表している。またOlson & McCubbin (1985) は、実証的研究によって家族ライフサイクルの各段階に生じるストレスの検証を行っている。

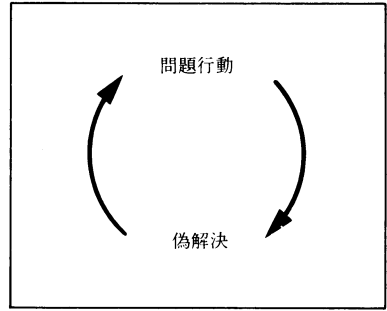
の変化に起因するストレスとがあることを考慮しなくてはならない。すなわち、個人のライフサイクル、あるいは家族のライフサイクルの各段階に応じた発達課題によって、必然的に生じてくるストレスと、むしろその発達段階とは無関係に、偶発的な社会的・状況的变化によって生じてくるストレスとがある。前者は家族の発達のストレスであり、個人の身体的・精神的・社会的発達や、それに伴う家族関係の変化に起因するストレスである。<sup>2)</sup> このような家族の内的環境の変化によって生じてくるストレスに対して、後者は家族の外的環境の変動によって生じてくるストレス、すなわち状況的ストレスである。例えば、思春期の子どもをもった家族の発達段階では、子どもの自立を含むように家族境界を柔軟にしていくことが発達課題として求められ、愛着と分離をめぐる親子間の葛藤が生じやすくなっている。このような発達のストレスに加えて、家族員の死別、事故、疾病などの、不測の出来事や、経済的不況による失業や倒産、さらに居住環境の変動などの状況的ストレスが重なって起これば、家族は危機に陥りやすくなる。家族危機を誘発するようなストレスについては、このような発達の・状況的な2つの側面を考慮すべきである。

第二に、家族にひとたび危機が顕在化すると、そのこと自体が家族システム内部に新たな影響をもたらし、また同時に家族外システムにも影響を及ぼすことを考慮しなくてはならない。この点については、家族危機の偽解決ループとその波及効果の2つの側面を検討しなければならない。

家族危機の偽解決ループは、家族の危機対処の方法が現実状況に即した適切なものでなく、むしろそれとかけ離れた不適切なものであるために、家族が危機に対処しようと試みるほど、かえって危機が維持され増悪していく悪循環のパターンである。

例えば、システム理論に基づく家族療法の領域では、システムのフィードバック機能に基づいて、様々な神経症的症状、問題行動等をめぐる家族危機の偽解決ループについての研究が行なわれてきているが、特にその一派であるMRI短期療法は、次のようなモデルを提示している(図-3)。このモデルによれば、家族内に発生する問題行動

図-3 〈MRI短期療法の原理〉

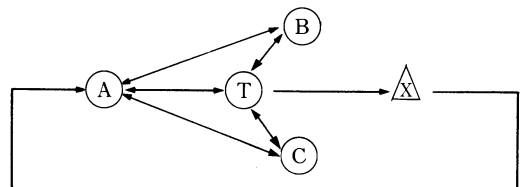


(John Weakland, 1984)  
長谷川(1987)より引用

は、それに対する家族の偽似的解決によって二次的強化をうけ、かえってそれを維持するようにはたらく。例えば、登校拒否児をもつ家族について考えてみれば、親が子どもの問題行動が発生するに至った経緯を十分に理解することができないままに、その解決のためにただ登校を促すような刺激のみを与え続けければ、子どもの不安は増大して、ますます登校することが困難になる。こうして子どもの問題行動は維持されて、家族の問題解決行動がかえって問題行動を強化する悪循環のパターンがくり返されるのである。

また、家族ストレス研究の領域においても、家族危機の偽解決ループに着目したいくつかの研究が認められる。McCubbin (1981) は、家族危機の対処段階においてストレスが累積されることを指摘し、その累積のパターンに、家族の危機対処のための行動それ自体によって新たなストレスが生じ、さらにストレスが加重されていく可能性を含めている。さらに佐藤 (1985) は、McCubbin の研究に基づいて、次のようなモデルを提示している(図-4)。彼は家族危機の対処過程を循環的にとらえ、家族の危機対処によってもたらされる結

図-4 ABCT→X循環モデル(佐藤、1985)



- A: ストレス源
- B: 危機対応資源
- C: ストレス源に対して下される定義づけ
- T: 対処
- X: 結果

果が新たなストレス源となり、危機が幾重にも循環していく過程を示唆しているのである。

以上のような点を考慮していけば、家族危機の対処段階において、その対処のしかたによっては、むしろ危機が悪循環を繰り返していくような偽解決ループが起りうる可能性が考えられる。しかしながら、このような偽解決ループは、家族システムのレベルにおいてのみ起りうるものではない。すなわち、家族の危機がその外部システムへと波及していくもう1つの側面を考慮しなくてはならない。

先にも述べたように家族システムは、その外的環境である社会システムを上位システムにもつ。言い換えるならば、家族システムは、社会文化システムの構成要素の一部であり、その下位システムを形成している。従って、家族システムとその外的環境としての社会文化システムとの間には絶え間ない相互作用があり、互いに影響を及ぼし合う関係にある。家族に危機が発生すれば、その影響は家族の外的環境にも及び、またその反応は再び家族にフィードバックされて何らかの影響を及ぼすはずである。

例えば、増野と近藤（1982）は、危機は周囲の人々を巻きこんで、広く波及していく効果をもつと指摘し、これをキーパーソンの危機と呼んでいる。家族に危機が発生すれば、それは家族をとりまく周囲の人々を巻きこんで混乱させる。なかでも、家族に少なからず影響を与える立場にあるキーパーソンが危機に巻き込まれて家族を適切にサポートすることができなければより家族の危機を維持、増悪するようにはたらいってしまう。さらに考えてみるならば、キーパーソンの危機に限定することなく、家族危機の影響はその外的環境としての社会文化システム、特にその家族の住む地域社会内の様々な人々や機関に広く波及するはずである。そしてそれらの人々、機関の反応や家族への関わり方によって、家族危機がより増悪されてしまうかも知れない。すなわち家族危機は、その外的環境への波及効果をもち、それによって家族と外部システムとの間でも、危機の偽解決ループが起りうるのである。例えば、精神障害者をメンバーにもつ家族は、往々にして患者の問題行動によって生じた家族危機の解決のために患者を

精神病院に入院させる。しかし、患者の入院によって「精神病患者のいる家族」というレッテルは強化され決定的なものとなり、家族以外から貼りつけられたレッテルによって家族は新たな苦悩をしょいこむことになってしまう（Langsley & Kaplan, 1968）。このような場合、家族をとりまく近隣者たちの精神障害者に対する誤解や偏見を含む反応が、家族に新たなストレスを与え、その危機解決をより困難なものにしてしまうのである。

このような家族をとりまく外的環境としては、親族、友人、近隣関係などのインフォーマルな社会関係のみでなく、医療、教育、福祉、行政機関等のフォーマルな社会関係等にも目を向けるべきである。後者の最も顕著な例として、荒川（1983）は、アメリカにおいては、警察官、教師、ソーシャルワーカーが危機にある人を援助するというよりも、それに巻き込まれないための保身術として危機介入の技法を習得することに力が入れられてきていると指摘している。もし、援助者自身が危機に巻き込まれ、家族に対して適切に関わっていくことができなければ、それは家族危機を維持させ、増悪させてしまうことになりかねないからである。

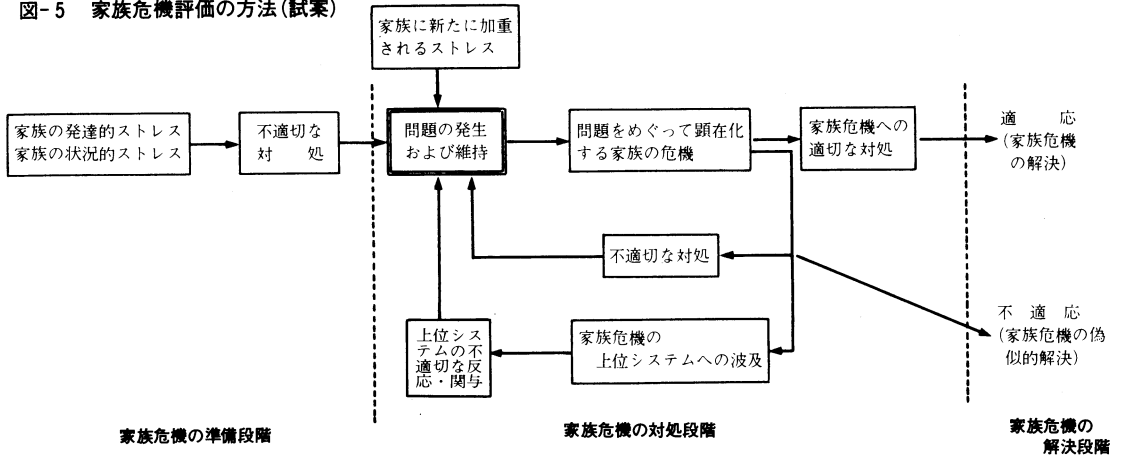
### (3) 家族危機の評価モデル

以上に述べてきた家族危機の時間的・空間的な2つの側面を考慮した上で、家族危機評価のための試案を提示してみたい。それは、次のような図によってあらわされる（図-5）。

家族危機の準備段階においては、家族危機が顕在化するまでにその原因となるような様々な発達の・状況的ストレスが発生し、それへの不適切な対処によって、家族にストレスが累積される。それは家族危機が潜在的に進行していく段階である。

家族危機の対処段階は、家族危機の結実因子となるストレスの発生によって、ついに家族が援助を必要とするような重大な問題が発生し、これをめぐって危機が顕在化する。これに対して家族が適切に対処することができれば、家族危機の解決段階において良好な適応を達成することができるが、むしろソーシャルワークによる援助を必要とする家族は、危機の波及とその偽解決ループとに

図-5 家族危機評価の方法(試案)



よって、適切な対処が困難なものになっている。危機の偽解決ループは、家族の不適切な対処によって悪循環を繰り返し、さらに、家族危機の上位システムへの波及、すなわち家族外システムへの波及によって、それらの反応や関与によっても悪循環を繰り返す。加えて、家族危機の対処段階において、さらに新たなストレスが発生し加重されていくようであれば、ますます家族危機の偽解決ループは強化されるだろう。このような場合、家族危機の解決段階において家族が達成できる適応レベルは、むしろ不適応的なレベルに留まり、それは危機の偽似的解決に過ぎない。

例えば、再び登校拒否児をもつ家族について考えてみよう。家族危機の準備段階では、子どもを主として家族に様々な発達の・状況的ストレスが発生し、それらに対して適切な対処が行なわれないまま累積されている。<sup>3)</sup> 家族は、なかでも特に子どもは、ストレスに対して脆弱な状態に陥っている。さらにそこへ家族危機を結実させる決定的なストレス(例えば、学校場面で子どもに加わる学習困難やいじめなどのストレス)が加わると、子どもの登校拒否という問題行動が発生し、それをめぐって家族の危機が顕在化する。家族危機の対処段階では、家族は子どもの問題行動をめぐって混乱し、子どもの症状発生に至るまでの経緯を理解できないまま、その対処行動として、ただやみくもに子どもを学校へ行かせようとするかも知れ

ない。さらに、家族危機はその周囲のシステムへも波及し、特に学校関係者や教師はストレスfulな状況に追いこまれ、適切な対処方法がわからないまま子供や家族に不適切な関与を繰り返す。このような危機の偽解決パターンによって、子どもの不安や混乱はますます増大し、問題行動は維持され、強化されてしまう。もし、このような偽解決パターンがくり返されれば、それはまさに悪循環の泥沼にはまってしまう。さらにそこへ全く新たなストレスが発生するならば、家族危機の偽解決ループはさらに強化され、悪循環が繰り返されるようになるだろう。このような悪循環が繰り返される場合、家族は不安と混乱の中で現実的知覚に歪みをきたし、当初家族が直面していたストレス、すなわち危機の準備段階で発生していたストレスを見失ってしまう。こうして家族危機への適切な対処は、ますます困難なものになるのである。

このような場合、家族危機の解決段階に至っても、多くの場合問題行動は依然として維持されている。家族は、子ども自身や学校に責任を転嫁し、ほとんど無力感に浸りながらどうにもなすすべがなくなっている。家族の均衡は一応保たれるようになるが、それは問題行動に対するあきらめや容認、あるいは責任転嫁などの対処方法を選択することによって得られたものであり、それは偽似的解決に過ぎないのである。

3) 登校拒否の発生に、家族の発達の・状況的ストレスが関わっていることについては、谷口(1986)による論文や、神戸市児童相談所編(1989)による著書に基づく。文献のレビューについては本稿の最後に参考文献として付記する。

以上、家族危機の評価モデルについて、筆者なりの試案を提示してみた。これまで述べてきた点を整理してみるならば、家族危機評価のためのポイントとして、次の4点が挙げられる。

- (1) 家族危機の準備段階において累積されてきたストレス（発達の・状況的）の明確化。またそれへの家族の対処パターンの明確化。
- (2) 家族危機の結実因子と、中心となる問題の明確化。
- (3) 家族の不適切な危機対処による偽解決ループの解明。
- (4) 家族外システムへの危機の波及効果と、それらの不適切な反応・関与による偽解決ループの解明。

援助者は、これらのポイントに従って、家族危機のいわゆる悪循環のプロセスとその波及プロセスとを明確にする。そして、家族が当初直面していたストレス、すなわち準備段階において累積されてきたストレスを理解し、それへの解決へと家族がむかうように援助することが重要である。本稿で提示してきた家族危機の評価モデルは、そのための指標を与えるものとして検討を加えてきた。それは、家族危機に効果的に関与し、その適切な対処を促進するためのベースとなると考えられる。

### 3. 家族危機対応資源の評価

これまで述べてきた家族危機の評価に加えて、危機状況下にある家族を援助するために必要となるものは、その対応資源の評価である。家族危機に適切に対処するための資源が、家族内・外に存在しているのかどうか、それを明らかにするための方法を検討していきたい。

本稿では、家族の危機対応資源を、家族の個人的資源、家族システムの内的資源、家族の社会的資源の3つに分類して考えていくことにする。

#### (1) 家族の個人的資源

家族の個人的資源としては、家族員個人の経済力、健康状態、教育レベル、性格などがあげられる(望月, 1987)。それは個人が自らの特性、資質、境遇等を利用して問題解決を行なっていくような

潜在的能力を重視している。

個人に注目する従来の危機理論においては、危機状況下にある個人の自我は傷つきやすく弱い状態にあり、特にその知覚に歪みが生じてくることが指摘されてきた。Aguilera & Messick (1974)によれば、ストレスの程度が個人の問題解決能力を損わない範囲内においては、知覚的混乱は問題の焦点化を促し、かえって個人の危機対処にとってポジティブに作用することがある。しかしながら、ストレスが個人の耐えうる限度を越えてしまえば、個人の問題解決能力は著しく損われ、知覚的混乱は危機対処を妨げる要因としてはたらくのである。

従って危機に適切に対処するためには、個人が現実状況に即してストレスを知覚し、それへの建設的な対処方法を検討していくことのできる能力が求められている。家族員個人の性格、価値観、さらに知的能力や教育水準は、個人の問題解決能力を左右する重要な要因である。また、個人の健康状態、経済力は、個人の問題解決能力に側面から影響を与えるような要因であり、危機対処のための重要な資源である。

家族危機の対応資源を評価するにあたって、もし家族内にこのような個人的資源を十分に有するメンバーが存在していれば、そのメンバーは家族危機対処のためのキーパーソンになりうると考えられる。特に、家族内でリーダーシップをとり、かじとりをとるべき立場にある両親や、また何らかの問題行動をあらわしているメンバー自身に、潜在的にこのような能力が備っていれば、それは家族危機対処のための重要な資源となるはずである。

#### (2) 家族システムの内的資源

家族システムの内的資源は、それぞれのメンバーからなる1つのシステムとしての家族に内在する資源をさす。この家族システムに内在する資源としては、家族のきずな (family cohesion) と家族のかじとり (family adaptability) の2つの能力があげられる(佐藤, 1985; 望月, 1987)。

Olson (1979)は、家族のきずなとかじとりの2つの次元を用いて家族システムの機能評価のための

「円環モデル」を提示している(図-6)。<sup>4)</sup>このモデルによって家族システムの機能的側面が評価されるが、それは危機状況下にある家族が危機に効果的に対処していくために重要な役割を果たす。

きずなどは、家族メンバーがお互いに持っている感情的なつながりである。そのつながりの強さの度合いによって弱いものから順に、バラバラ(disengaged)、サラリ(separtded)、ピッタリ(connected)、ベツタリ(emeshed)、という4段階に分かれ、まん中にある2つの段階(サラリ、ピッタリ)にある家族は、家族の機能がうまく働いていると評価される。また、かじとりは、家族の発達の・状況的ストレスに対応して、夫婦・家族システムの勢力構造、役割関係、家族の規則を変化させる能力である。その家族のもつ変化する力の度合いによって、その力の低いものから順番に、融通なし(rigid)、キッチリ(structured)、柔軟(flexible)、てんやわんや(chaotic)、という

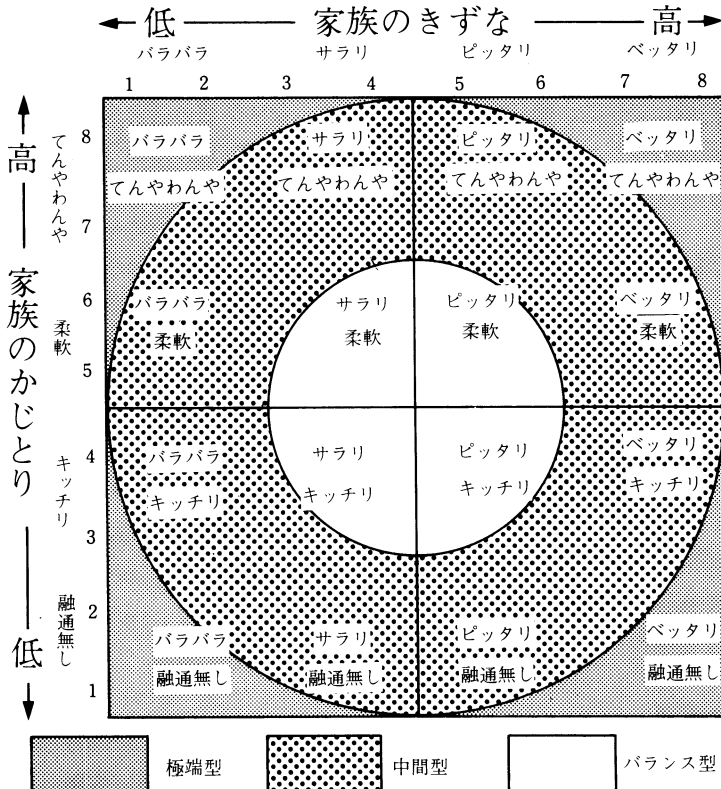
4段階に分けられ、まん中の2つの段階(キッチリ、柔軟)にある家族は、家族の機能がうまく働いていると評価される。その反対に、いずれの次元においても両極に位置する家族は、その機能に問題のある家族である。

こうして、それぞれ4つの段階をもつ2つの次元であらわされる16タイプの家族があり、円環図の中心部分に近く位置する家族ほど、家族危機に対しても効果的に対処していけることが示されている。すなわち家族のきずなどかじとりは、1つのバランスのとれたシステムとして機能的に問題解決を行なっていくために必要な能力であり、それゆえに家族危機に対処するための重要な資源であると認識されるのである。

### (3) 家族の社会的資源

家族の社会的資源は、家族とそれをとりまく家族外システム間の社会関係に注目する。家族

図-6 円環モデル(Olsonら、1979による)



4) 武田・立木は「家族のきずな」「家族のかじとり」をはじめ、Olsonの円環モデルを構成する一連の下位概念についての研究を行っている。これらについては「家族システム評価のための基礎概念」に詳しい。本図は彼らの論文からの引用である。



が、その社会関係によって様々な支援を得ることができるならば、家族の危機対処はより適切に行われるはずである。特に近年わが国においては、高度経済成長に伴う社会的変動によって、核家族化の増大や、さらに家族の地域社会からの孤立化が問題視されている。それゆえに、家族が危機に対処するための資源としての、社会的支援の意義がますます重要視される傾向にある。

Caplan (1974) に基づけば、社会的支援を与えるシステムは、自然発生的サポートシステム（親族、友人、近隣関係など）、民間主導型サポートシステム（自助グループ、ボランティア組織など）、制度化されたサポートシステム（行政、各種専門機関など）の、大きく3つに分類される。また、Swenson (1979) に基づけば、家族にとって意味のある社会的ネットワークは、親族、教育、宗教、政策、職業、福祉、医療、リクレーション、友人、近隣等の様々なシステムに含まれるフォーマル、インフォーマルな両者の社会関係である。

家族の社会的資源の評価においては、家族の住む地域社会に、これらの資源が存在しているかどうか、あるいはそれらを家族が利用することに困難が生じていないかが評価されるべきである。<sup>5)</sup> さらに、社会的資源が存在していても、それ自身が家族にとって有効に利用していただけるものかどうかの評価されるべきであろう。House (1981) は、社会的支援の果す役割を、情緒的支援、道具的支援、情報的支援、評価的支援とに分類しているが、家族の社会的資源がこれらの支援を家族に対して十分に行なっていけるものかどうか重要なのである。

#### 4. 今後の展望

以上、家族危機とその対応資源の評価について述べてきた。家族危機の評価は、そのメカニズムを時間的・空間的側面から評価し、また家族危機の対応資源の評価は、家族員個人、家族システム、家族の社会関係の3つのレベルによって資源の評

価を行うものである。

今後の課題としては、このような評価に基づいて、一体どのような介入方法が導き出されるのかという点が残る。本研究に基づいて筆者が提言できることは、家族危機の偽解決パターンとその波及をくいとめ、家族にとって有用な内・外の資源を提供、または開発していくことである。さらにもう1点つけ加えるならば、危機が変化を促進する側面を活かして、病理的レベルで均衡を維持しようとする家族に対して治療的に危機を引き起こす試みがなされてきていることである。<sup>6)</sup> このような危機のポジティブな側面を意図的に利用することを加えれば、その介入方法はより柔軟に様々な状況下にある家族に応用していけるだろう。

近年、ソーシャルワークの領域において、家族をより広くエコロジカルな視点からとらえようとする動きが高まってきている。今後これらの動向をもふまえた上で、その介入方法をも含めて再検討を行っていきたいと考えている。

#### 参考文献

- Aguirela, D. c., & Messick, J. M. *Crisis Intervention*; The C. V. Mosby Company, 1974. (小松源助・荒川義子訳、『危機療法理論と実際』, 川島書店, 1978年.)
- 荒川義子「米国における危機介入の現状と課題」, 『社会福祉学』第24-2号, 1983.
- 荒川義子「危機介入」, 武田建・荒川義子編, 『臨床ケースワーク』, 川島書店, 1986年.
- Caplan, G. *Support Systems and Community Mental Health*. New York; Behavioral publications, 1974.
- De Hoyos, G. "Person-in-Environment; A Tri-Level Practice Model." *Social Casework*, 70(3), 1989.
- Golan, "Crisis Theory." In F. J. Turner (ed), *Social Work Treatment*. New York; Free Press, 1979.
- Golan, N. *Passing Through Transition*; Free Press, 1981.
- Hartman, A. "To Think about the Unthinkable." *Social Casework*, 51(10), 1970.
- Hartman, A. "Diagnostic Assessment of Family Relationships." *Social Casework*, 59(10), 1978.

5) Hartman (1978) は、親族関係を中心とする大家族を系図的に評価するための genogram と、家族の社会関係を空間的に評価するための eco-map の2つの評価道具を紹介している。

6) Hartman(1970), Umana(1980) は、この可能性を指摘している。また Baptiste(1983) は、家族療法によって治療的に危機を引き起こすアプローチを試みている。

- 長谷川啓三『家族内パラドックス』, 彩古書房, 1987年.
- Hill, R. *Families Under Stress*. New York :Harper, 1949.
- Hill, R. "Modern Systems Theory and the Family : A Confrontation." *Social Science Informdtion*, 1971, 10.
- Hoffman, L. *Foundation of Family Therepy*. New York : Basic Books, 1981.
- House, , J. S. *Work Stress, and Social Support*. Reading, Mass. ; Addison-Wesley, 1981.
- Jackson, D. D. "Family Rules, Marital quid pro puo." *Archives of General Psychiatry*, 1965, 12.
- 神戸市児童相談所編『そんなに急がせないで; 登校拒否を理解するために』, 神戸市社会福祉協議会, 1989年.
- Langsley, D. G., & Kaplan, D. *The Tredtment of Families in Crisis*. New York ; Grune & Stratton, 1968.
- Maruyama, M. "The Second Cybernetics : Deviation-Amplifying, Mutual Causal Processes." *American Scientist*, 1963, 51.
- 増野肇・近藤喬一編『精神衛生活動の実際』, 金剛出版, 1982年.
- 望月嵩「家族の危機」, 森岡清美・望月嵩共著, 『新しい家族社会学』, 1987年.
- McCubbin, H. I., & Patterson, J. M. *Systematic Assessment of Family Stress, Resources and Coping : Tools for Research, Education, and Clinical Intervention*. ; University of Minnesota, 1981.
- Olson, D. H., Sprenkle, D. H., and Russell, C. "Circumplex Model of Marital and the Family Systems I ; Cohesion and Adaptability Dimension, Family Types and Clinical Application." *Family Process*, 1979, 18.
- 佐藤豊道「危機における家族機能」, 石原邦男編, 『家族生活とストレス』, 垣内出版株式会社, 1985年.
- Speer, D. "Family Systems : Morphostasis and Morphogenesis, or is Homeostasis Enough?" *Family Process*, 1970, 9.
- Swenson, C. "Social Networks." In Germain, C. B. (ed), *Social Work Practice ; People and Environments*. New York ; Columbia University Press, 1979.
- 谷口泰史「登校拒否の実態理解と処遇観」. ソーシャルワーク研究, 1986, 12 (3).
- Umana, R. F., Gross, S. J. & McConville, M. T.; *Crisis In the Family ; Three approaches*. New York ; Gardner Press Inc, 1980.
- Weakland, J. Workshop for Brief Therapy MRI. 1984.
- Wynne, L., Rockoff, I. M., Day, J., & Hirsh, S. I. "Pseudo-Mutuality in the Family Relations of Schizophrenics." *Psychiatry*, 1958, 21.
- 山本和郎『コミュニティ心理学』, 東京大学出版会, 1986年.